

演題：

補綴装置製作における基準と情報共有の重要性
～日常臨床の実践的アプローチ～

抄録：

昨今、歯科技工士を取り巻く環境は急速に変化しており、その要因の一つに製作方法のデジタル化が挙げられます。補綴装置製作においてCAD/CAMやIOS（Intra Oral Scanner）に代表されるデジタル機器の活用が不可欠となってきており、従来のようにひたすら手技を磨く時代から、デジタル技術を柔軟に取り入れ、いかに効率的かつ高品質なものを提供できるかが重視されるようになりました。業界誌やセミナーでもデジタルを扱った内容が中心となり、機械や材料の種類、加工精度も日々進化を続けています。こうした背景から歯科だけでなく、医療全体の在り方にも大きな影響を与えていくと考えられています。

当ラボでも、IOSを用いたケースは従来法に比べ大幅に時間と手間を減少できることを実感しており、それに付随してマテリアルの変化への対応と作業効率の改善を図るべく、3Dプリンターを活用しています。こちらではプリントモデルとパターン（デンチャーフレーム・Cr-Br）の製作を主としており、精度も向上してきました。またジルコニアやCAD/CAM冠に関しては、高精度なミリング加工を実現すべくデザインデータを作成し、外注にて加工をしています。このようなデジタルの活用は、作業時間の短縮、効率化、品質の安定化など、多くの恩恵を受けられることを日々感じています。

一方、様々な症例がある臨床では、デジタルのみで完結させることが困難なケースも多く、従来法によるアプローチが適している場合があります。特に歯列の再建、咬合再構成を図る症例では（歯科）医療という観点から、フェイスボウトランスファーとチェックバイトまたはゴシックアーチトレーサーによる咬合器の確実な顎路調整が肝であり、製作する補綴装置を顎口腔系の機能と調和させることが重要です。こうすることで口腔内では安定した状態を長期間維持でき、患者のQOL向上に大きく寄与することを学んできました。その根底には、チェアサイドとラボサイド間で『基準』の共通認識、診査・診断や治療計画の立案、さらに患者の情報や人生背景、受診に至った経緯などを共有することがあり、それにより円滑なコミュニケーションが図られ、“より良い補綴装置”に直結していることを、日々の臨床を通じて実感しています。

こうした情報を正確かつ確実に伝えるには、写真による記録も欠かせません。質の高い写真は、ただ魅せるためだけでなく、情報共有やコミュニケーション、工程の確認、品質管理、プレゼンテーションの作成において重要な役割を担っています。撮影には、F値（絞り）、シャッタースピード、ISO感度などの基本設定に加え、光源の位置や光量調整、ホワイトバランス、背景色の選択、三脚の使用など周辺環境への配慮も大切です。高価な機材や特別な設備がなくても、カメラの基礎知識と工夫次第で十分質の高い写真を撮影できると考えており、技術の一つとして日々試行錯誤を重ねています。

そこで、本講演ではこれらの要素を踏まえた臨床ケースを供覧させて頂くとともに、一眼レフカメラの基本設定および各技工物に応じた撮影上の工夫についてご紹介したいと思います。

少しでも皆様の臨床の一助となれば幸いです。